



食肉の歴史

今号から数回にわたり、お肉の話掲載していきます。まずは食肉の歴史からです。

古代人は何を食べていた

旧石器時代に人はすでに焼肉をしていたことがわかっています。縄文時代、生活の中心は狩猟でした。地球の温暖化により森林が増え、これら樹木の果実である栗やドングリを好んで食べる鹿や猪が増えたからです。しかし、狩猟だけで生活していたわけではなく、海辺の人々は積極的に漁労をして魚介類を食べるようになり、また、クルミ、ドングリ、栗等の堅果類を採取して主食とする食生活が確立するようになりました。

弥生時代の特徴は水稲農業が導入されたことです。水稲だけでなく畑作も盛んで、ヒエ、アワ、野菜類も作られています。元来、日本人は穀類や野菜中心の食生活だから、肉食が体に合わない、という言い方は人類史の矮小化にすぎません。弥生人は農業だけではなく、狩猟や漁労で自然から調達していました。

仏教の肉食禁止

日本の食文化史には、外国にはない特徴があります。それは、仏教の影響を大きく受けたもので、飛鳥時代後期に天武天皇が出した「殺生禁止令」、俗にいう肉食禁止令で、その後12世紀頃まで歴代の天皇から繰り返し出されています。しかしこれは表向きで、大衆の間では密かに鳥やウサギを食べていました。

奈良時代には鹿と猪が食べられていたようです。しかし、国民全体の栄養状態に影響するほどの量はなく、我が国の慢性的な低栄養の大きな要因となったのです。

牛肉食のはじまり

室町末期から安土桃山、そして江戸時代初期までの日本の政治経済、文化に大きな影響を与えたのは南蛮文化です。西洋人が肉食の生活を持ち込み、織田信長の時代に肉食が日本で注目されるようになり、キリスト教の布教とともに牛肉料理を食べていました。

しかしこれも長続きせず、1587年、秀吉によって出された「伴天連追放令」の中に「牛馬をと畜（と殺）して食用に供すること

の禁止」が挙げられ、その後キリスト教禁止令や鎖国政策により肉食が定着することはありませんでした。

また、元禄・文化文政の時代にはポタン肉（猪・山鯨、もみじ肉（鹿）、さくら肉（馬）の鍋料理が町人の間で親しまれていました。

牛肉食禁止の崩壊

1853年に鎖国が終わり、外国人を中心に牛肉食が普及、確立していきました。

明治期に入ると、牛肉食は文明開化の象徴のようにもはやされ、新政府は種々の肉食奨励策を出しました。その結果、1877年（明治10年）頃には東京で牛鍋屋が558軒にもなりました。当初は老廃牛を食べていましたが、肥育された牛肉が上質牛肉として好評を得、鉄道輸送の開始とともに需要が拡大しました。しかし、明治後半には、牛肉は不足状態になりつつあり、それを補うために豚肉が登場してきます。

豚肉需要の拡大

大正時代に入り、食肉需要構造が大きく変化し、豚肉の需要が急速に増大しました。日露戦争などの軍需増大で牛肉が不足したため、

これをカバーする意味で庶民の間に豚肉のうまみが認識され、脚光を浴びることとなりました。

統計を見ても、1912年（大正元年）に21万3千頭余りであった豚の・畜頭数は1918年（大正7年）には牛の・畜頭数を上回りました。1925年（大正14年）にはなんと3・6倍の76万6千頭が・畜され、豚肉の需要の急速な拡大を裏付けています。

近代から現代

1945年（昭和20年）の終戦の頃までは、軍事優先の食糧政策のため、定着し始めていた肉食の習慣も中断しました。1949年（昭和24年）になって小売店で食肉が買えるようになり、昭和30年代から米の増産とともに急速に肉食が一般化して、消費量も戦前を超えました。

食肉、油脂、乳製品を積極的に摂るようになった昭和40年代中頃、日本人の平均寿命は男69歳、女75歳となり、現在では人生は80年時代を迎えています。食生活に食肉を上手に取り入れている結果ではないでしょうか。

（食肉の知識第3版より）